

SMC金融・経済マーケットレポート

Reporter Your Financial Brain SMC 豊島 健治

家計はリスクを冒すか (安全ネットとリスクの境目)

日本全体の資金循環を捉えた時、最も健全性を保っているのは家計部門である。

家計は、戦後から現在に至るまで一貫して貯蓄に励み、その蓄えた金融資産は今では1,400兆円にも昇っている。その貯蓄は、高度成長期には企業部門の資金需要を支え、この10年は大幅に資金不足に陥った公的部門を支えてきた。家計の負債は、増えたとは云え未だ400兆円弱だから差引き1,000兆円の資金余剰となっていて、その姿は健全といい。

そんな家計部門を評価して、「公的債務が600兆円を超えたからと云って、日本にはそれを支える豊かな個人金融資産があるから心配する必要はない」などと云うエコノミストもいる。私はそうは思わないが、個人金融資産がどのように動くかが我が国の行方に大きな影響を及ぼすことだけは確かだと思ふ。

資産とは、見方を換えれば他の者の負債である。銀行のバランスシートを見れば直ぐ分るが、私達預金者の預金(個人資産)は銀行にとっては負債である。銀行はそれを貸出や国債で運用する。貸出や国債は当然乍ら銀行の資産であるが、借り手や国にとっては負債である。そうして資産と負債が輪になって資金は循環している(これを資金循環と呼ぶ)。

日本国内に個人・法人・公的部門合わせて約2,500兆円の金融資産があるが、実際に流通している現金通貨は55兆円程である。従って、2,400兆円以上は、「資産としてはある」がそれは「他者の負債としてある」のである。云って見れば、資産と負債の連鎖の中で、帳簿の上でそれぞれの金融資産が記載されているのだ。

もちろんそれは一国の中の資金循環である。世界全体でも同じように資金が循環している。資金が一国の中でだけ動き回るのであれば、前述のエコノミストが云うように「660兆円も問題ない」だろうし、又更なる財政支出拡大も可能かもしれない。しかし、国内に留まっている金融資産が外に流れないという保証など何処にもないし、むしろ外へ流れて行く量が加速することだって考えられる。その時は外からお金を引っ張ってく

るしかない。つまりは米国のように対外依存型になる。基軸通貨国でない国が、資金繰りを外に依存するのは危険なことだ。

ところで、長い間貯蓄に励んで巨額金融資産を築きあげた我が国の個人は、今その金融資産をどうしたらよいか迷っているように見える。

理由は幾つかあるが、一つは歴史的レベルでの超低金利が続いていることがある。1回のカード利用手数料を利息で賄うのに溜息の出るような金を積まなければならなくなってしまった。

そしてもう一つは、金融資産の60%近くを占めている預貯金の安全性が預金保険機構と云う公的組織に守られているに過ぎないことが露呈したことだ。預金保険機構の保険料は誰であろう自分達の預金から支払われている(厳密には預金量に応じて個別金融機関が支払うが)。仕組みは相互扶助に過ぎない。郵貯にしても財政投融資にそっくり回され、そこから資金融資を受けている特殊法人には多額の補助金が垂れ流されている。資金の流れから見ると、郵貯利用者の受取る利息(の一部)は利用者を初めとする国民の税金が流される。結果として、「自分で払って自分で貰う」という馬鹿げた現象が出現する。

少し言い過ぎかも知れないが、これが安全(ノーマリスク)の正体だったのではないか。銀行預金そのものが、そして郵便貯金そのものが決して安全だったのではない。そんな姿が白昼目の前に現われて、金融資産保有者のこころを揺り動かし始めた。そして選択肢の探求が始まった。内に置くか、それとも外へ出すか。間接金融商品に留めるか、それとも直接金融商品に行くか。

資産の裏側には必ず負債がある。そして負債の更にもその向う側にも資産があって負債がある。負債を持つ者は、リスクに挑戦して資産者の期待するリターンを上げなければならない。それが現在の経済体制の基本原則だ。そこになければならないのは、常にリスクにチャレンジする精神である。

リスクという言葉は語源的に「今日の糧をかせぐ」という意味のアラビア語だそう。その意味で云えば、リスクを避けては「今日の糧をかせぐ」ことは出来ない。

家計(個人)も法人(経営者)と同じように、「今日の糧をかせぐ」為にはリスクを冒さなければならない。そんな時が来ていると思うが...